「日々の理科」（第 660 号） 2016（H28),-4,27

「カラスノエンドウの教材性（３）」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

２回目の自然観察に出かける前に、カラスノエンドウ（ヤハズエンドウ）の面白さを、教室よく話しておいた。すると、「カラスノエンドウ狩り」に大フィーバーが起こってしまった。

さっそくヨモギの群落の中に、２本のカラスノエンドウを発見したようだ。根元がどこか慎重に探って、植物体全体を採集しようとしている。幸い、大学構内にはこの野草が、刈って捨てるほど繁茂している。大学には環境整備の予算は少ないほうが良い。多いと、毎月草刈をされてしまい、こういう雑草は一掃されてしまうからだ。

袋からはみ出すほどの「大収穫」お目当ては、観察でも、花でもなく「豆の鞘」である。

教室に持ち帰ると、机上はこんな状態に。こんなに集めてどうするのか、と思ったら、「お豆はいかがですか？」と豆屋さんを始めて、大繁盛していた。

当然、鞘の中を観察してみたくなる。私なんかよりも、小さな手の子どものほうがずっと器用で、苦も無く鞘を分解してゆく。

子どもがむいた、カラスノエンドウの鞘。この子どもは、観察カードに「やせい（野生）のおまめなのに、みどり色のほう石みたいにきれいでした。」と書いていた。とても楽しい活動だった。